

資料紹介 梅原末治から寺師見國への手紙

竹森友子

はじめに

鹿児島県歴史資料センター黎明館には、一九三〇年代から逝去する一九五九（昭和三十四）年まで鹿児島県の考古学に大きな力を尽くした寺師見國が調査・採集・発掘した考古資料や、発掘調査のメモ、蔵書、書簡など二万点余りが寄贈され收藏されている。

今回はその中から、人文科学としての考古学を学問的に独立させた功労者と評される濱田耕作⁽¹⁾逝去のあとを受けて、一九三九（昭和十四）年から一九五六（昭和三十一年）年まで、京都（帝国）大学文学部考古学講座の教授として活躍した、大正時代から昭和時代前期の日本の考古学界をリードした梅原末治⁽²⁾が寺師に送った手紙について、いくつか紹介したい。

一 梅原末治と寺師見國

梅原末治は一九九三（明治二十六）年大阪府南河内郡古市村（現羽曳野市古市）の農家に生まれた。一九〇九（明治四十二）年に同志社普通学校（中学校）に入学し、地理と歴史に興味を持った。三年生の時には歴史地理学会の夏期大講演会に参加し、そこで喜田貞吉⁽³⁾と親しくなり、

一九一二（明治四十四）年には奈良県の古蹟調査会の第一回会合に出席していた高橋健自や関野貞⁽⁴⁾などの河内の諸遺跡への案内役を依頼されるまでになった。その際、数日間調査も行ったように、高橋から墳墓の特徴や遺物の出土状況など近代考古学の調査法を、関野からは実測図の作り方の指導を受けている。梅原は、彼らが調査中日々調査したメモや実測図をその日のうちに整理しているのを見て、自分も実践することを心に誓った⁽⁵⁾。梅原の考古学研究上の信念は、着実な資料蒐集と整理を土台として築きあげなければならない、というものであったが、この時の経験がその後の考古学人生を決定づけた。

病弱だった梅原は高等学校や大学への進学はかなわなかったが、興味があれば大家であろうと恐れず近づいて教えを請い、そうして習得した技術で、京都帝国大学の研究室や文学部の陳列館に出入りし、無給ではあるが自由に仕事をする許可を得た。当時の日本考古学界に遺物の整理（実測・拓本・写真など）技術を持つ人材は皆無に等しく、重要な戦力⁽⁶⁾となったようだ。

一九一六（大正五）年に日本最初の考古学講座（文科の）が開設された京都帝国大学には、史蹟名勝天然記念物保護法制定（大正九年）により、西日本各地の遺跡調査が依頼された。また、大正五年朝鮮⁽⁷⁾総督府の古蹟調査委員に任命された濱田の片腕として、西日本各地の古

墳や遺跡の調査、朝鮮半島南部の発掘調査などを行っている。梅原の世代は日本の考古学界がまだ専門家社会として制度化する以前の段階で、アマチュア出身者がアカデミズムの中枢に入り込む機会が開かれており、一九二五（大正十四）年十二月から一九二九（昭和四）年四月までの欧米への長期遊学を経て、東方文化学院研究所京都研究所（京都大学人文科学研究所の前身）の研究員、一九三三（昭和八）年には京都帝国大学文学部考古学講座の助教授、そして前述したように、濱田耕作の逝去にともない教授となった。

寺師見國は一八八九（明治二十二）年に鹿児島県川辺郡知覧町塩屋（現南九州市知覧町塩屋）に生まれた。一九一六（大正五）年九州帝国大学医学部を卒業後、翌年大口市（現伊佐市）で内科・小児科医として開業した。九州帝国大学在学中に九州考古学の基礎を築いた中山平次郎に薫陶を受けたが、一九三〇（昭和五）年に早稲田大学卒業後大口中学校に赴任した木村幹夫との出会いが、考古学の道へと進むきっかけであった。⁽⁶⁾

一九三二（昭和七）年の日勝山遺跡発見を考古学の道への第一歩として、一九三六（昭和十一）年には「鹿児島県伊佐郡内の古墳」を『考古学雑誌』（二二六一六）に発表し、中央の学界にもその名が知られるようになった。⁽⁷⁾ 縄文土器や弥生式土器の研究も行っているが、戦前戦後を通して精力的に行っているのが、大隅半島北部の地下式横穴墓（寺師は地下式土壙と呼ぶ）や地下式板石積石室の調査である。以下では梅原から寺師に送られた手紙の中から、地下式横穴墓やその出土品に関する記述のあるものの一部を紹介したい。

二 梅原末治からの手紙

梅原と鹿児島との関わりは、一九三六（昭和十一）年末に肋膜炎を患い、指宿で静養したことに始まるが、考古学的なそれは一九四三（昭和十八）年であった。梅原は自伝である『考古学六十年』に「昭和十八年も後半に入ると、国外はもとより、人材や費用の面で、国内の調査も思うにまかせず、（中略）遠くとも鳥取県あたりに手をのばすのがやっとという状況に追い込まれてきた。（中略）宮崎・鹿児島県を中心に、非常時下の発掘調査を敢行したのだった。そのきっかけというのは、昭和十八年、鹿児島県知事から、その頃国威高揚のため唱えられていた「肇国聖跡顕彰」の史跡調査を依頼されたことである」と記している。⁽⁸⁾

これには当時の政治的状況が関係している。それについては、森本和男氏の研究に詳しい。以下その研究成果を紹介すると、一九三五（昭和十）年、岡田啓内閣は天皇機関説を否定する国体明徴声明を発し、文部省は、国体を明徴にし、国民精神を涵養振作する⁽⁹⁾のが急務だとし、『国体の本義』を編纂して一九三七（昭和十二）年に刊行した。本文の冒頭で「大日本帝国は、万世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ。これ、我が万古不易の国体である」と宣言され、国体の起点として神代が重視された。そして国体明徴の一環として、国体に関する重要な文化財として肇国の遺跡に目が向けられ、政府による神代遺跡の調査保存事業が開始された。一九四一（昭和十六）年内閣に肇国聖跡調査委員会が設置され、国史・神祇史・古典など各分野の学者が委員とされたが、考古学からは梅原が選ばれた。⁽¹⁰⁾ 天孫降臨の舞台となった南九州では肇国の遺跡調査に熱心で、一九四三（昭和十八）年四月一日

	年 月 日	内 容	
1	葉書	昭和19年2月29日	江田古墳出土品を調べているということ
2	封書	昭和20年11月16日	小林久雄氏の入洛や小林行雄氏が筑紫村の装飾古墳の調査を行うことなど
3	葉書	昭和23年5月1日	国立博物館奈良分館で開催される日本考古展覧会（5/1～5/31）のお知らせ
4	葉書	昭和23年5月1日	国立博物館奈良分館において開催される日本考古展覧会の批評會をもうけたいのお知らせ
5	葉書	昭和23年6月26日	九大の法文学部より考古学の講義依頼を受け22日から講義をしている
6	封書	昭和23年10月5日	お菓子のお礼
7	封書	昭和24年カ 6月5日	全国に互る古墳の本格的な調査をやらなければならなくなったことや、感冒薬・頭痛薬・胃薬を送って欲しいとのお願い
8	葉書	昭和24年8月20日	暑中見舞い。『朝鮮語譯』を記念に差し上げること
9	封書	昭和24年カ 10月31日	日本考古学協会で全国の古墳の基本調査をすることが決まり、鹿児島県については寺師氏にお願いしたい
10	葉書	昭和24年カ 12月1日	『サツマの弥生式土器論』のお礼、古墳調査の締め切りを12月と伝えたのは誤りで本年度中なので来年の3月が正しいとのこと
11	葉書	昭和25年	賀状
12	葉書	昭和25年4月16日	古墳の調査書類を五月末までに全部完了するようにお願いしたい
13	封書	昭和25年5月12日	古墳の調査書類到着のお礼や寺師氏が発掘しようとしている古墳の許可について。自分の都合が悪ければ、代理を出すことなど
14	封書	昭和25年5月16日	北園博氏の調査した大隅の古墳の記録を受け取ったことや去年坪井氏が発掘した縄文住居址の写真や土器の図を欲しい、ということなど
15	封書	昭和25年カ 6月18日	薬や東大の人々がお世話になったお礼と、墓について（一般の堅穴式石室と違うので、御説のように伊佐式と申してよいでしょうとある）
16	封書	昭和25年7月25日	鹿屋の新出土品のお知らせへのお礼。出土状況は日向のむつはるの地下坑に似ている
17	封書	昭和26年1月3日	寺師氏を送った薬や息子の郁氏への品物のお礼など
18	封書	昭和26年カ 1月28日	4年ぶりに江田でお目にかかり愉快であったことや薬やお餅のお礼など
19	封書	昭和26年3月6日	寺師氏の娘さんの結婚のお祝いなど
20	封書	昭和26年5月6日	常盤氏が来訪の際に寺師氏が御寄与下さった品を受け取った報告や、この夏銅鐸考でもまとめようかと考えていることなど
21	封書	昭和26年カ 5月13日	体調がおもわしくなく、渡米を見合わせたことなど
22	封書	昭和26年12月24日	郁氏へ送った昆虫図鑑のお礼（梅原郁氏の手紙も一緒に同封）や風邪薬のお願い
23	葉書	昭和27年2月1日	薬のお礼と、鼻の工合が悪く気管支がへんとのこと
24	封書	昭和27年2月17日	木炭のお礼、1俵はお言葉通り小林氏に渡すとのこと
25	葉書	昭和27年2月27日	名医の診察はすべて自分の症状に一致するとのこと、炭のお礼
26	封書	昭和28年1月8日	木炭のお礼と、感冒薬を送って欲しいとのお願い
27	封書	昭和28年7月19日	9月上旬にアメリカへ行くことになったことや、山崎さんが亡くなられたことへのお悔やみ
28	封書	昭和29年カ 8月23日	今朝立つ案でお返事を書いたが、仕事が入り無理になったというお詫び
29	封書	昭和29年カ 10月10日	感冒と頭痛のお薬を送ってほしいとのお願い
30	封書	昭和29年12月7日	鯉節のお礼
31	葉書	昭和30年1月21日	高山町の地下式土壙から銅鏃が見いだされたとのこと、日向の六つの原地下式土壙と併せて考えると新たな見解が導かれるのではないかと
32	葉書	昭和30年1月26日	お菓子のお礼と仁徳神陵の規模の調べを書き上げたとの報告
33	封書	昭和30年カ 7月26日	寺師氏が調べた年号鏡について報告したことのお礼や、この夏宮地獄の方に行く予定で、その際、大口の方にも寄ろうと思っていることなど
34	封書	昭和30年カ 12月24日	高山町の古墳の第4号古墳出土の四種の鉄刀片は大小2口になるのではとある
35	封書	昭和31年10月11日	「東京丸ノ内ホテルにて」とある。薬のお礼と14日の午前1時、台北へむかうとの内容
36	封書	昭和31年12月25日	「東京丸ノ内ホテルにて」とある。台北の帰りで今日東京にもどったことや、薬のお礼
37	封書	昭和32年カ 1月20日	蔵手刀のを出土した地下式土壙について報告したことのお礼
38	封書	昭和32年カ 2月24日	蔵手刀の出土状態に関する寺師氏の見解は正しいのではないかと
39	封書	昭和32年カ 5月7日	抜刷（「鹿児島県下の地下式土壙」カ）のお礼
40	葉書	昭和32年12月13日	薬のお礼
41	封書	昭和33年カ 6月20日	寺師氏の配慮で同地の調べ（成川遺跡カ）が斎藤忠氏によって行われることのお礼や、河口貞徳氏が関わった徳之島の先史遺跡の報告書や県の文化財報告書を見たいということなど
42	封書	昭和34年カ 6月14日	寺師氏を送った鏡の写真について
43	封書	昭和34年9月7日	病気の間、アメリカ、スイスなどの学者からお見舞い文をいただいた。教育部長のアンダーソン夫妻の送別の時の写真を送ったようである
44	封書	年不明 1月18日	薬のお礼
45	封書	年不明 1月24日	風邪薬を送って欲しいとのお願い
46	封書	年不明 8月30日	薬や郁氏へのお菓子のお礼
47	封書	年不明 1月31日	薬やボンタン漬のお礼
48	封書	年不明 7月24日	郁氏の近況や火葬墓の調べのお礼など
49	葉書	年月日不明	寺師が出した調査計画書に指導者として署名捺印をしましたとのこと
50	葉書	年不明12月29日	お嬢さんから妻へのお便りありがたく存じますとのこと
51	葉書	年不明2月28日	土器の復元で忙しいと思います。坪井氏は十個くらいは復元できるのではないかと書いていました、との内容

表1 梅原末治より寺師見國への書簡（※昭和〇〇年カとあるのは、文中の語句よりの推定）

に、県知事を会長とした鹿児島県聖跡調査委員会が設立された。⁽¹⁰⁾

つまり、梅原が昭和十八年に鹿児島県知事から「肇国聖跡顕彰」の史跡調査を依頼された背景は以上のようなことなのであった。ちなみに、鹿児島県肇国聖跡調査委員会設立時の鹿児島県知事は薄田美朝、梅原に依頼したのは柴山博であったと思われる。そして、梅原と寺師が出会ったのもこの時であった。昭和十八年十二月に武貝塚を視察し、翌年一月に試掘している。また、梅原は昭和十九年には栗野町北方3号墳や大口市塞ノ神地下式石積も調査をしたようだ。⁽¹¹⁾ 梅原から寺師への手紙（封書・葉書）は五一通残されているが（表1参照）、一番古いものは昭和十九年二月二十九日付けの葉書であり、武貝塚の試掘を終え帰京した後書かれたものであろう。

知り合ってから寺師が逝去する一九五九（昭和三十四）年までは毎年手紙を送っているが、その大半は葉書を所望するものである。梅原は幼少期より身体が弱く、成人してからも酒や煙草は一切口にせず、規則正しい生活を送ることにより学問を続けることが出来ていたが、少々無理をすると体調を崩すという状態で、医者である寺師との交流は、心強いものだったであろう。

三 梅原からの手紙の紹介と解説

なお、手紙を翻刻するにあたり、改行については手紙に忠実ではない。また、読みやすいように句読点を補い、旧仮名遣いを現代仮名遣いに改めている。文中の■は読み取れなかった文字である。

①昭和二十四年カ十月三十一日付の手紙

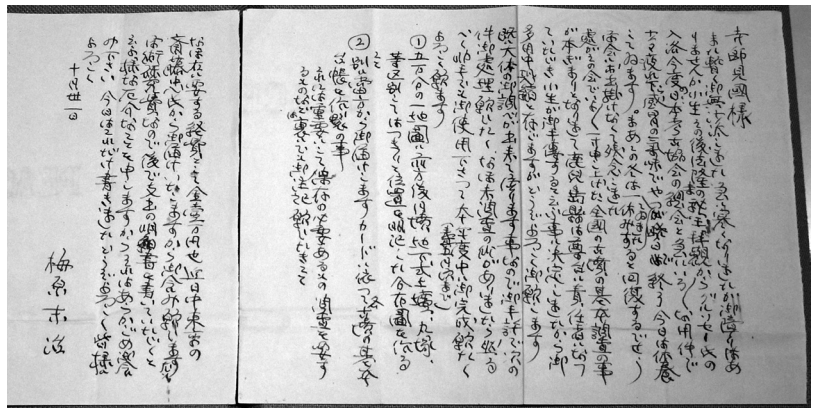


写真1 昭和24年カ10月31日付の手紙

〔本文〕

寺師見國様

また暫く御無沙汰しました。急に寒くなりましたが御障りはありませんか。小生その後法隆寺の秘宝拝観からグルンゼー氏の入洛、今度の日本考古協会の総会と急にいろいろな用件で少々疲れたら感冒の気味でやっています。今日で終了、今日は休養しています。まあこの冬は一休みすると回復するでしょう。■会にお出掛けなくて残念しました。

処がその会でいよいよ一寸申し上げた全国の古墳の基本調査の事が本ざまりとなりまして、鹿児島県は尊台に責任者になっていた。だき小生が御手伝すると云う事は決定しましたから、御多用中恐縮と存じますがどうぞよろしく御願います。既に大体の御調べが出来て居ります事なので御手許で次の件御処理願いたく、なお未調査の所がありましたら然るべく助手でも御使用下さって本年度中に御完成願いたくよろしく願います。（■■■■頃まで）

①五万分の一地図に前方後円墳、地下式土壙、丸塚、等区別してはっきりと位置を明記した分布図を作ること

②別に当方から御届けしますカードに依って各古墳の基本台帳を作製の事

これには重要にして保存の必要あるもの、調査を要するものなどは裏にでも御注記願いたきこと

なお右に要する経費として金壺万円也近日中東京の斎藤忠氏から御届けしますから御含み願います。尤も学術研究費なので後で支出の明細書を書いていただくと云う様な厄介なことを申しますからそれはあらかじめ御含み下さい。今日はこれだけ書きました。どうぞよろしく皆様によりしく

十月三十一日

梅原末治

【解説】

この手紙は、日本考古学協会の総会で決まった、全国の古墳の基本調査について、鹿児島県の責任者を寺師に依頼したものである。日本考古学協会とは、戦時中強調された神話に基づく皇国史観を棄て、考古学の結果から日本上古史を改変することを基本方針とした進駐軍の提言により、国内の考古学者を網羅して、一九四八（昭和二十三）年に設立された協会である。⁽¹²⁾

法隆寺の秘宝拝観とあるのは、一九四九（昭和二十四）年、解体修理中であった法隆寺の五重塔が完成するにあたり、一九二六（大正十五）年に五重塔の塔心柱下から発見されて埋め戻されていた、銅製容器に入れられた舍利一具を今後見ることが出来なくなる危険性から、羽田亭^{はねだとおる}を中心とした梅原を含む十一人のメンバーで十月十六日から四日間調査が行われていたことを指す。梅原は、前年の秋から肺結核ではば一年間病床にあり、外出が許されて早々の調査であった。⁽¹³⁾

この手紙の本文中には差し出し年が無く、封筒の切手部分が剥がされて消印もわからず差し出し年は不明であるが、手紙の内容と一九五〇（昭和二十五）年には古墳に関する調査の報告書が提出されている（表1-13）ことから、昭和二十四年に出された手紙と判断した。

②昭和三十年カ十二月二十四日付の手紙

【本文】

寺師見國様

年末御繁用の中から高山町古墳についての詳しい御調書を御送りい

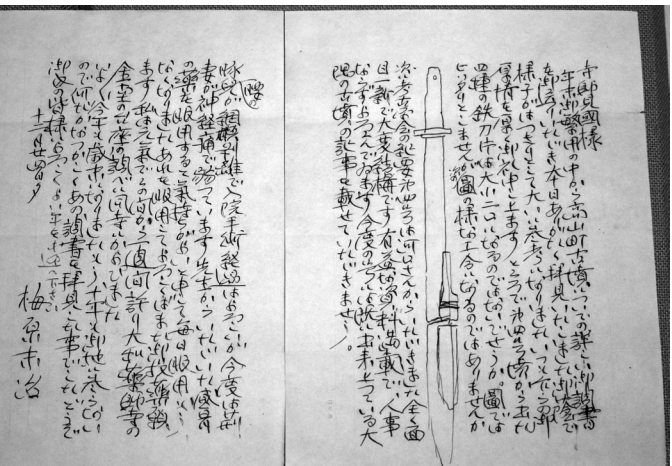


写真2 昭和30年カ12月24日付の手紙

ただき本日ありがたく拝見いたしました。御蔭で様子がつきりとして大いに参考になりました。いつも乍らの御厚情を厚く御礼申し上げます。ところで第四号墳から出た四種の鉄刀片は大小二口になるのではないのでしょうか。図ではピッタリとしません。図の様な工合になるのではありませんか。

〔 鉄刀の図 〕

次に考古学会の紀要第

四号は河口さんからいただきました。全く面目一新で大変結構です。有益な資料満載で人事ならずよろこんでいます。今度の号は既に来上がつている大隅の古墳の記事を載せていただきます。

豚児が網膜剥離で入院、手術経過はよろしいが今度は荊妻が腰の神経痛で弱っています。先生からいただいた感冒の薬を服用すると気持ちがいよと申して毎日服用とうとうなくなりました。あれを服用してよろしくばまた御投薬願います。私は元気でこの間から一週間許り大和薬師寺の金堂の台座の調べに同寺にかよいました。

いよいよ今年も歳末になりました。もう十年も御地に参らないので何だかなつかしくあの調書を拝見した事でした。どうぞ御内の皆様によろしく。よい年をお迎へ下さい。

十二月廿四日夕

梅原末治

【解説】



写真3 4号墓出土鉄刀

この手紙も消印が潰れていて差し出し年が不明であるが、一九五五（昭和三十）年十二月二十日発売の記念年賀切手（「こけし」）が封筒に貼られている。そして本文に目を向けると、「大和薬師寺の金堂の台座の調べ」とあり、梅原は自身の発掘調査年表では薬師寺金堂の台座の調査を昭和三十一年～三十二年としている。¹⁴ただ、薬師寺金堂の薬師三尊の台座は、修理のため昭和三十年の十二月十六日に仮台座に移されている。¹⁵その時台座内部から種々の遺物が発見されており、梅原に調査依頼がきた可能性は高いのではなからうか。「この間から一週間許り」とあるのも、

十六日の一週間後は二十三日であり、手紙が書かれた日付の二十四日も矛盾しない。また、昭和三十一年の十二月二十四日は台湾にいたと思われる（表1-36）ことや、本文中「考古学会の紀要第四号は河口さんからいただきました」とある『鹿児島県考古学会紀要』四号が昭和三十年十一月発行であることから、一九五五年に出された手紙と判断した。

手紙にある、高山町古墳の4号墳から出た四種の鉄刀片とは、肝属郡高山町新富（現肝属郡肝付町新富）の横間地下式横穴墓群の4号墓（現在では5号墓とされている）¹⁷から出土したとされる、直刀三（二刀は折れて長さ不明、一刀は全長五九・五cm、刀身四五cm、六所透鉄鏢並切羽付）と刀子一のことであろう。なお、横間地下式横穴墓群は現肝付町役場から北東に約一・五kmのところ、肝属川および高山川により形成された沖積平野に突き出た標高約二〇mの舌状台地上にある。現在は近接する円墳八基とともに横間古墳群と呼ばれている。¹⁸

写真3が「四種の鉄刀片」にあたると思われる。写真は、六所透鉄鏢並切羽付の直刀の実測図に貼られていたものであるが、実測図には昭和三十一年十一月八日発見、昭和三十年十二月四日実測というメモがある。とすれば、実測後すぐに梅原に報告したと思われる。ただし、十二月四日の調査の様子を撮影した写真が貼られているスクラップ帳には昭和三十一年十二月四日撮影とのメモがある。4号墓は、玄室が長さ一八二cm、幅九二cm、高さ四〇cmで、人骨も一体出土しているが、スクラップ帳にはその他4号墓から出土した土器や人骨の写真や準備の様子などの写真も貼っており（写真は宮原十郎氏撮影とある）、メモは昭和三十年の間違いだとなると、実測と同時に写真撮影も行われたのである。

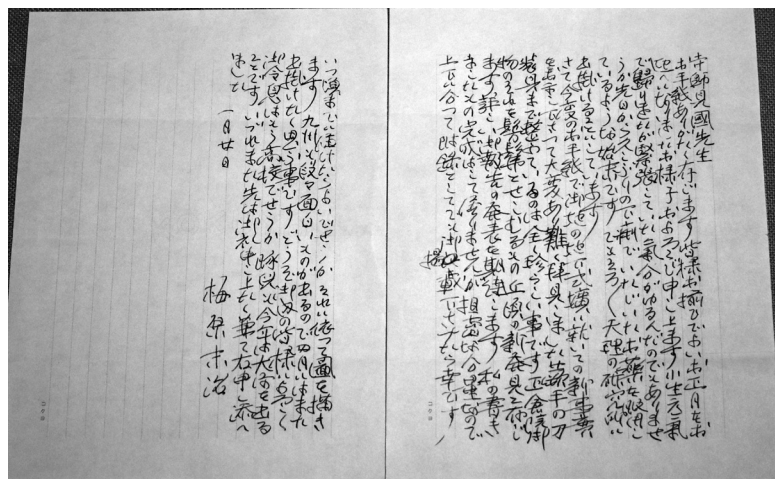


写真4 昭和32年1月20日付の手紙

う。

③ 昭和三十一年カ一月

二十日付の手紙

【本文】

寺師見國先生

お手紙ありがたく存じます。皆様お揃いでよい

お正月をお迎へになりましたお様子よろこび申し上げます。小生元気で

帰りましたが緊張していた気分がゆるんだのでもありましようか、先日から久しぶりの下痢でいた

だいたお薬を服用しているような始末です。でもそろそろ天理の研究所に出掛けることにしています。

さて今度のお手紙で御地の地下式墳に就いての新事実をお示し下さって大変あり難く拝見しました。蕨手の刀装具まで整っているのは全く珍らしい事です。正倉院御物のそれを髣髴とせしむるもの、近頃の新発見と存じます。詳しい御報告の発表を期待します。私の書きましたもの完成はして居りませんが相当な分量なので、上下に分つて附録としてでも御掲載下されたら幸いです。いつ頃までに届けたらよいでしょうか。それに依つて図を描きます。九州も段々面白いものが出るので四月はま

た出掛けたく思う事です。どうぞ御内の皆様によりしく。御令息はもう高校でしようか。豚児も今年は大学を出ることです。いづれまた先は御礼申し上たく兼て右申し添へました。

一月廿日

梅原末治

④ 昭和三十一年カ二月二十四日付の手紙

【本文】

寺師見國様

写真三葉等同封の御手紙数日前到着ありがたく拝誦いたしました。

まだどうも胃腸の工合が面白くなく、それに天理研究所への引越しかれこれなつていて、つい筆不精をして申しわけありません。四月にもなれば立派な小生の研究室が天理に出来るので是非見ていただきたく思うことです。

さて御同封の写真に關ことこの御高見二つながら小生もその通りだろうと存じます。殊に第一の蕨手刀の出土状態に關す

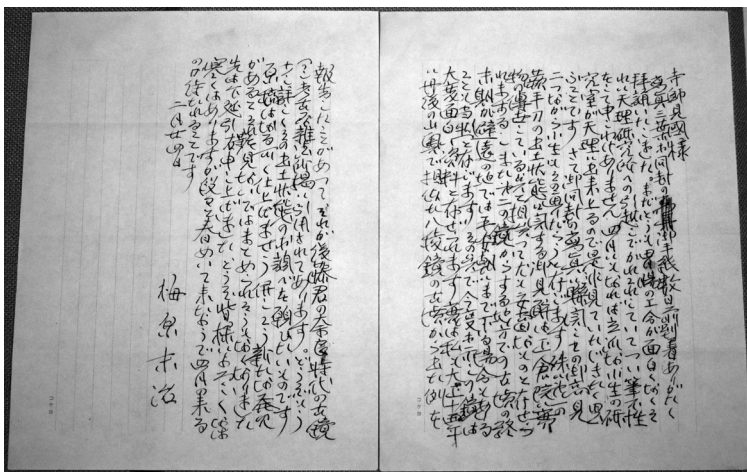


写真5 昭和32年2月24日付の手紙

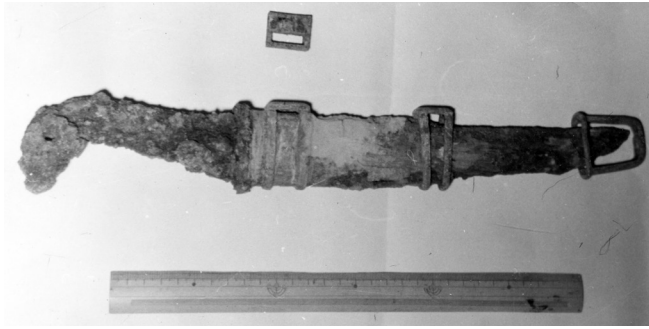


写真6 2号墓出土の蕨手刀と帯金具

る御見解は正倉院に実物の傳世している其と相俟つて尤も安当なもの
と存ぜられますし、また第二の鏡からする地方での古墳の終末期が僻遠の
地では平安朝にまで下る場合もあることも当然と存じます。その点で今
度お示しの鏡は、大変面白い資料と存ぜられます。実は私も大正十五年
に丹後の山奥で相似た八稜鏡の古墳から出た例を報告したことがあつ
て、それが後藤君の奈良時代の古鏡(?) 考古学雑誌所掲に引用されて
あります。どうぞもう少し詳しくその出土状態のお調べをお願いいた
います。

原稿はなる可く仕上げましょう。併しこう新たな発見があるとそれ
等を見ないではまとめられそうもなくなりました。先は乍延引右申しま
した。どうぞ皆様によりしく。なお寒くはありますが段々と春めいてき
ます。

たようで四月の来るのが待切れること
です。

二月廿四日 梅原末治

【解説】

③④とも差し出し年は不明である
が、③の本文中の「豚児(=梅原郁
一筆者)」も今年は大学を出ること
す」とある郁氏の大学卒業年から昭和
三十二年と判断した。

③④は、一九五六(昭和三十一年)年
八月に京都大学を退官し、天理大学
の「おやさと研究所」の中国部門の主
任兼韓国考古学の研究員となった梅原

が、前述した横間地下式横穴墓の2号墓(現在では3号墓とされてい
る)から出土した蕨手刀(わらびてとう)に関して述べている手紙である。2号墓は、玄
室の長さ二二〇cm、幅七〇cm、高さ二五〜三〇cmで、副葬品は蕨手刀の
ほか刀子一、鉄鏃二、須恵器皿一も出土しており、副葬品は人骨の左腰
部に置かれていた。⁽²²⁾ 寺師は2号墓出土の蕨手刀の年代を奈良時代末か平
安時代初め頃のものと考えていたようだが、梅原もそれを支持してい
るようだ。蕨手刀の実測図に、昭和二十九年十二月出土、昭和三十一年一
月四日実測と記載されており、③は実測後すぐに梅原に報告したと思わ
れる。

また、④に出てくる鏡であるが、横間地下式横穴墓群から鏡の出土は
報告されておらず、出土した八稜鏡(はちりょうきやう)という条件に当てはまるのが、寺師
が「鹿兒島県の古鏡(特に神社の鏡)」で報告している、一九五三(昭
和二十八)年に国分直一(こくぶんなおいち)が山川町福元の岩崖下埋葬遺蹟より発見した瑞
花双鷲八稜鏡(半分欠損、直径二寸七)の唐代の白銅鏡のことであろう
か。なお、梅原が「大正十五年に丹後の山奥で相似た八稜鏡の古墳から
出た例を報告したことがあつて」と言っているのは、一九二七(昭和
二)年に「竹野郡鳥取村の平安朝初期の墳墓」⁽²³⁾で紹介している鏡(亀鈕
瑞花双鳳紋八稜鏡)である可能性が高い。

おわりに

今回は主に横間地下式横穴墓群に関する手紙を紹介した。寺師は「鹿
兒島県下の地下式土壙」の結語で「私がかねて畏敬する斯道の学者、梅
原末治先生が間接のご指導と鞭撻を給わった事に対して心からの謝意を

呈する次第である⁽²⁶⁾と謝意を述べているが、遺物などの実測が終わると直ちに梅原に報告し、それに対して梅原もすぐ何らかの意見を述べた手紙を送っていることがわかった。筆者は文献古代史専攻のため、手紙から引き出せる情報は多く無いが、本稿が横間地下式横穴墓群研究や梅原末治研究の一助となれば幸いである。

註

- (1) 斎藤忠「浜田耕作・梅原末治」(『考古学史の人々』第一書房、一九八五年)二五八頁。
- (2) 梅原末治「考古への道」(『考古学六十年』平凡社、一九七八年)一〇四頁。
- (3) 注(1)に同じ、二五九頁。
- (4) 穴沢味光「梅原末治論―モノを究めようとした考古学者の偉大と悲惨―」(角田文衛編『考古学京都学派』雄山閣出版、一九九四年)二二九頁。
- (5) 注(4)に同じ、二二五～二二六頁。
- (6) 池畑耕一「鹿児島県考古学界の先人たち(5)」(『鹿児島考古』第三七号、二〇〇三年)八一頁。
- (7) 斎藤忠「寺師見國・小沢国平」(注(1)に同じ)四二二頁。
- (8) 梅原末治「新しき門出」(注(2)に同じ)一八九頁。
- (9) 森本和男「戦時下の史跡保存」(『文化財の社会史―近現代史と伝統文化の変遷』彩流社、二〇一〇年)四八四～四九九頁。
- (10) 注(9)に同じ、五〇八～五〇九頁。
- (11) 出口浩・池畑耕一「鹿児島県考古年史」(『鹿児島考古』第二〇号、一九八六年)一〇三頁。
- (12) 梅原末治「戦後の考古学」(注(2)に同じ)二〇六頁。
- (13) 注(12)に同じ、二一〇～二二二頁。
- (14) 梅原末治「発掘調査略年表」(注(2)に同じ)三四〇頁。
- (15) 「昭和30年美術界年史」(『日本美術年鑑』昭和三十一年度、東京国立文化財研究所、一九五七年)一八頁。
- (16) 『天武天皇千三百年玉忌記念 薬師寺』(薬師寺、一九八六年)二六七～二六八頁。
- (17) 寺師見國「鹿児島県下の地下式土壙」(『鹿児島県文化財調査報告書』第四輯、鹿児島県教育委員会、一九五七年)では、横間地下式横穴墓群は高山町新富(横間)土壙として紹介され、第一号壙は「昭和廿九年十二月十六日発見形状不明」とされているが、『高山町郷土誌』(高山町、一九九七年)とそれを受けた『先史・古代の鹿児島(資料編)』(鹿児島県教育委員会、二〇〇二年)では、寺師が別に「高山町、新富、西横間(和田上)土壙内石棺」として報告した内容を横間地下式横穴墓群の一号墓としており、以下寺師の報告とは、一つずつ番号がずれている。
- (18) 寺師見國「鹿児島県下の地下式土壙」(註(17)に同じ)四〇頁。
- (19) 新福深「横間古墳群」(『先史・古代の鹿児島(資料編)』鹿児島県教育委員会、二〇〇五年)六六〇頁。
- (20) 注(18)に同じ。
- (21) 注(12)に同じ、二二二頁。
- (22) 注(18)に同じ、三九頁。
- (23) 寺師見國「高山の古墳より出土した蕨手刀」(『大隅』第4号、一九五八年)五二頁。

- (24) 寺師見國「鹿児島県の古鏡（特に神社の鏡）」（『鹿児島県文化財調査報告書』第二輯、鹿児島県教育委員会、一九五四年）二八頁。なお国分直一は、山川町福元出土の鏡について、「鹿児島県山川港に於ける崖葬」（『農林省水産講習所研究報告 人文科学篇』1、一九五五年）の中で報告している。
- (25) 梅原末治「竹野郡鳥取村の平安朝初期の墳墓」（『京都府史蹟勝地調査会報告』第八冊、京都府、一九二七年）六一―六四頁。なお、報告書は国立国会図書館のデジタルコレクションで見ることができる。
- (26) 注(18)に同じ、五五頁。

（たけもり ともこ 本館学芸課資料調査編集員）